

『つながり』を意識し、考えを広げる物語文の授業を目指して
～ I C Tや振り返りを活用した聴き合う活動を通して～

篠岡小学校 山本 佳和

1 主題設定の理由

新型コロナウイルスが猛威を振るい、2020年の2月末から全国一斉の臨時休校になった。その期間に改めて考えさせられたのが、教室で顔を合わせて一緒に学ぶ意義である。在宅でも課題の受け渡しができたり、リアルタイムで学ぶことができたりする。しかし、『つながり』という面で物足りなさを感じた。臨時休業明けの児童の様子からも『つながり』を求めていることがうかがえた。

学習面でも『つながり』の重要性を感じた。特に感じたのが国語科の物語文である。平成29年告示の小学校学習指導要領には、国語科の内容として、「読むこと」の指導事項に「構造と内容の把握」「精査・解釈」「考えの形成」「共有」の4つが掲げられている。

「共有」について「文章を読んで形成してきた自分の考えを表現し、互いの考えを認め合ったり、比較して違いに気付いたりすることを通して、自分の考えを広げていくこと」と記されている。共通の文章を読み、それぞれの経験や知識を文章とつなげて考えを形成し、それを聴き合って、新しい自分の考えに出会うことが一緒に学ぶ意義であり、物語文の醍醐味である。

昨年度担任した6年生の児童は、読書が好きな児童が多く、休み時間には友達と声をかけ合って図書室を利用していた。特に本学級の児童は、1年間で図書室の本を1400冊以上借りるほどであった。しかし、5月に実施した国語のアンケートでは、国語が好きと回答した児童が全体の半数もいなかった。一方で、「学習の中でコンピュータなどのI C T機器を使うのは勉強の役に立つと思いますか」というアンケートでは、実に95%の児童が肯定的な回答をした。そこで、I C Tや振り返りを効果的に活用し、『つながり』を意識した聴き合う活動を通して、自分の考えを広げたり深めたりすることができないかと考え、本主題を設定し、実践を行った。

2 目指す子ども像

(1) 経験や知識と物語の世界をつなげたり、自分の考えと友達の考えをつなげたりできる児童。

(2) 物語文を読み、考えを広げたり深めたりして、物語を読み深め、読み味わうことができる児童。

3 研究の仮説

(1) I C Tを活用すると、児童同士の考えがつながりやすくなったり、物語や経験・知識とつながりやすくなったりするだろう。

(2) 振り返りを効果的に活用することで、文章をより読み深め、自分の考えを広げることができるだろう。

4 研究の構想（計画・方法）

(1) 実践単元

「やまなし」（9月）「海の命」（1月）

(2) 手立て

ア 『つながり』を目的に、I C Tを積極的に活用する。

イ 授業の終わりに振り返りを書かせ、互いに読み合うことができるようにする。

(3) 検証方法

抽出児童を設定し、その変容を中心に見る。

ア 抽出児童A：文章から読み取った考えを積極的に発言することができるが、友達の考えを受け入れられない。また、考えが表面的で浅い。

イ 抽出児童B：外国にルーツのある児童。文章から自分なりの考えや思いをもったり、友達の話聞いて考えを広げたりできるが、意見を発信することができない。

5 研究の実際と考察

ここでは、二つの授業実践の事例を挙げ、その考察を行う。

(1) 第1次実践「やまなし」(9月)(8時間完了)

ア 単元について

本教材「やまなし」は、宮沢賢治の代表的な作品で、かにかの親子の目から見た小さな谷川に起こる出来事を描いたものである。作品は、「五月」と「十二月」の二つの幻想世界が対比的に描かれており、「死」と「生」、「暗」と「明」が象徴的に表現されていて、作品を通して宮沢賢治の独特の描写で表現されている。子どもたちがそれぞれに感じ取った情景や出来事を聴き合うことで情景がより鮮明になり、宮沢賢治の思想や願いに迫ることができる教材である。

イ 研究の実際

(ア) 手立て①『つながり』を目的に、ICTを積極的に活用する。

単元を通し、タブレット内のアプリケーション「ロイロノート」を使用した。ロイロノートは、児童にとって直感的な操作が可能で、タッチペンで書きこみをしたり、線を引いたりすることが容易にできる。カメラやインターネットとも連動していて、自身のノートを撮影したり、調べたものを貼りつけたりできる。また、「提出」という機能があり、授業者が課題を設定すると、児童は課題に沿ったものを作成して提出する。提出されたものは授業者が一覧で確認することができるだけでなく、「共有」の機能を使用すると、児童同士が提出されたものを見ることができる。提出されたものや自身が作成したものは蓄積され、いつでも見返すことができる。



〈資料1 グループで聴き合う様子〉

単元の始めに、PDF化した教科書の本文データを全児童に送り、毎時間書きこませた。その意図としては、蓄積ができ、前の場面を振り返ることが容易にできることとグループや学級全体で共有を図りやすいと考えたからである。グループでの聴き合う場面では、互いの顔とのタブレットが見合えるように机の隊形を風車のような形にし、タブレットは立てないように指示をして聴き合う活動をさせた。(資料1) また、聴き合う中で、意味が分からない言葉や情景が想像しにくい事柄は、インターネットで調べて良いこととした。

以下は、児童Aのグループの授業記録である。物語の始めで、かにの子どもたちの目線で見た谷底を宮沢賢治独特の描写で表現した場面である。

児童C	どこに線引いた？
児童D	(タブレットを見せながら)「なめらかな天井」に線を引いたんだけど、 どういうこと？なめらかって・・・
児童A	おれも線を引いた。きれいな感じじゃない？
児童C	波があんまり立ってない感じじゃないの？
児童A	波？波って？
児童C	プールに入っているときに、・・・(うまく聞き取れず) (その後タブレットを一人で操作)
児童D	(タブレットを操作しながら) 1行目に「かにの子どもらが、青白い水の 底で」って書いてあるよ。
児童A	そっか。これ、底にいるかにが見てるのか。
児童C	(インターネットで画像を探して) こんな感じじゃない？
児童A	なるほどね。
児童E	上の方や横の方は暗いけど、青白い水の底って意味反対やん。
児童A	青白いのはナレーターの谷川を上から見たやつ。暗いのはかにの目線じ ゃない？
他の児童	ああ～。

〈資料2 A児のグループの会話〉

児童Aは、一人読みでは「天井」という言葉が、谷底にいるかにの子どもたちから見た水面のことだと分かっておらず、情景を読み取ることができていなかった。グループで他の児童と聴き合う中で、谷底にいるかにの目線から描かれているものだと気付いて場面設定を理解することができた。さらにインターネットで検索して見つけた水中から見た水面の画像を児童Cが提示し、児童Aの理解をより深めることができた。派生して、児童Aの発想から、他の児童の読みが広がるきっかけとなった場面だった。

全体で聴き合う場面では児童同士が互いに顔を見ることができるよう机を教室の中心に向かせてコの字の隊形にした。教室の前方には、大型のスクリーンを用意し、本文データを投影して考えの共有を図った。

(資料3) どの叙述に着目したのか分かるようにスクリーンの本文に線を引いたり、書きこんだりして、聴き合う活動の焦点化を図った。また、グループで聴き合う際に参考にした資料で、全体で共有して考えさせたいものは、教師のタブレットに一度送信させ、スクリーンに投影すると同時に、児童の各タブレットにも送信して共有を図った。



〈資料3 全体で聴き合う様子〉

以下の場面は、「十二月」の場面で、「五月」と「十二月」を対比的に表現している情景について全体で聴き合っている場面の授業記録である。

T 1	グループでどんな話をしたか聞かせてください。
児童 F	「トブン」と「ずうっとしずんで」に線を引いて、落ちてきたやまなしはいきなり落ちてきて、（手を動かしながら）重いからしたまできた感じかなって話しました。
T 2	他のグループはどう？
児童 G	やまなしの実を調べてみました。「トブン」だから「ポトッ」とかじゃないから軽なくて…
T 3	画像あるかな？送ってくれる？
児童 G	（教員のタブレットに画像を送り、スクリーンに写る）丸くて皮がしっかりしてる。リンゴより小さいけどそこそこ大きさがありそう。「トブン」だから「ポトッ」とかじゃないから軽なくて…
T 2	周りの人と話を聴き合ってみて。
児童	（グループを中心に周りとお話を聴き合う）
T 3	どう？
児童 H	硬そう。
児童 I	中身がつまってる感じ。
T 4	情景を想像しながら、本文のここ（スクリーンで示しながら）を音読しましょう。
児童	（それぞれ音読）
T 5	児童 B さんは、どんなことを想像しましたか？
児童 B	「首をすくめて」だから、かわせみと同じように勢いよくきたのかなと思いました。
T 6	五月の場面とつなげたんだね。どう？
児童 J	五月は敵がきたけど、十二月はエサが落ちてきた。

〈資料 4 全体で考えを聴き合った授業記録の一部〉

宮沢賢治の独特の描写に児童たちは目を向けることができている。全体で聴き合う前のグループの時間に、情景をいまいち想像できていない児童 A に対して、同じグループの児童 F が、「トブン」から読み広げた情景を一生懸命に話していた。それを把握していたので、全体の聴き合う場面で意図的に児童 F を指名し、聴き合いの出发点とした。この場面でも、インターネットで調べたやまなしの画像を用いて、情景を思い浮かべる材料としていた。ただ、児童が提示したのは、木から落ちる前のもので、宮沢賢治が描いているものとは限らない。しかし、画像で提示されたものに児童たちは引っ張られ、本文から離れて想像を膨らましていた。そこで、物語の本文とつなげて読み広げられるように音読を取り入れた。音読後に、児童 B を意図的に指名した。児童 B は、一人読みやグループでの聴き合いの際に、タブレットを操作して「五月」と「十二月」の場面を何度も見比べていた。話す言葉は少なかったが、本文内の叙述を捉えて読み広げていた。そこから、「五月」と「十二月」を対比する視点で話し合いが進んでいった。

(イ) 手立て②振り返りの蓄積と共有

毎授業の最後にノートに振り返りを書かせた。振り返りの視点として、本時の中で読み広がったことと読み広がるきっかけとなった友達の名前とその考えを書くように指導した。振り返りで友達の名前を書くために、授業内で友達の考えに必死に耳を傾ける様子が

うかがえた。

第一場面での振り返りは、友達の名前こそ書いていたが、「〇〇さんみたいにたくさん発表したい」とか、「〇〇さんと同じ意見で共感した」など、感想や考えが具体的でないものが多かった。そこで、各自で書いた振り返りを撮影してロイロノート内の機能を使って「提出箱」に提出させ、「共有」の機能で互いに見ることができるようにした。その際、内容が具体的で、考えの広がりとそのきっかけを書いている児童Bの振り返りを取り上げて全体に紹介した。

児童Aの第一場面での振り返りでは、物語の内容に触れて書くことができなかった。しかし、第四場面の振り返りでは、物語の内容に触れて自身の考えの変化や広がりを書くことができ、友達とつながることで読みを深めることができたと分かる。

児童Bは、授業中の発言こそ少ないが、しっかりと友達の話に耳を傾け、自分の考えとつながろうとする姿勢が振り返りからもうかがえた。

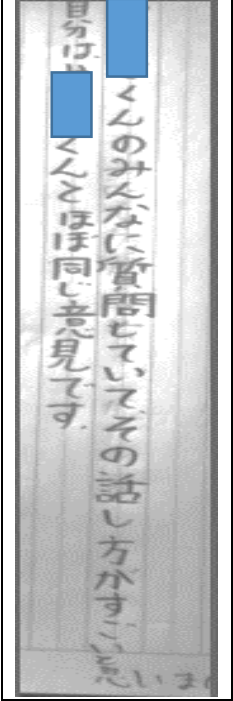
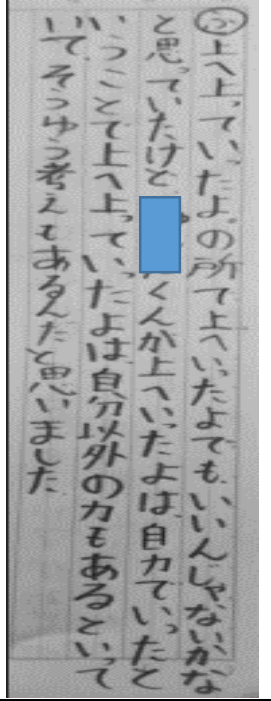
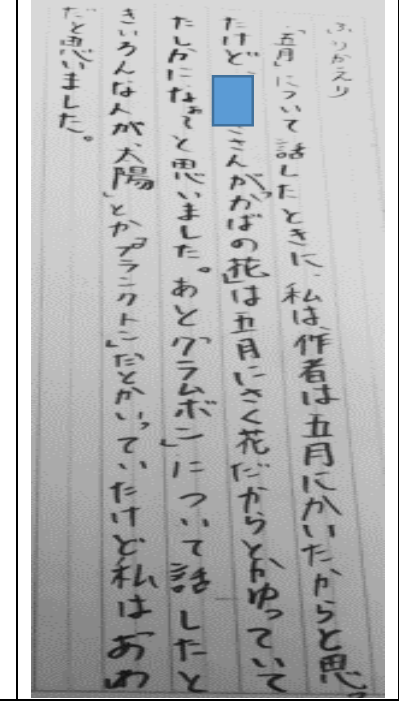
ウ 考察

(ア) 仮説アについて

データ化した本文への書き込みは、特に指示していないが、児童が工夫して線の色を変えていたり、本文にロイロノートの機能「テキスト」をつなげて書き込みをしたりとタブレットやアプリケーションの特徴をうまく生かして活用していた。聴き合う場面では、以前は教科書やワークシートを使っていたが、タブレットを媒体に聴き合うことで、ズームをしたり、ポインターをつかったりして聴き合う箇所を焦点化することができた。特に児童Bは、着目した文章や言葉を明確にすることで、グループや全体で意欲的に発言する姿が増えた。また、グループで聴き合う中で、言葉の意味が分からないことや実際の様子が想像しにくい事柄は、インターネットで調べ、画像を提示・共有することで読み広げた物語の世界観が伝えやすくなっていた。児童Aについては、一人読みで正しく理解できていなかった場面も、友達の影響や提示された画像から考えを改め、読み広げることができていた。一方、画像が提示されることで、物語の世界観の広がりが限定されてしまったり、本文から離れてしまったりした場面が散見された。

(イ) 仮説イについて

各自が本時の振り返りを書き留める場面を設定し、さらにその振り返りを学級全体で共有することで友達の影響とつながることができた。また、新しい考えに出会い、物語を読

児童A		児童B
第一場面	第四場面	第一場面
		

〈資料5 児童Aの振り返りと児童Bの振り返り〉

み広げられたといえるだろう。児童Aは、友達とつながることで自身の考えが広がったことを実感できた。児童Bは授業中こそ発言は少なかったが、振り返りを書いて提出することで、考えを学級全体に発信することができた。それにより、児童Bの考えをきっかけに他の児童が考えを広げることができた。このことが、児童Bにとって意見を発信する自信につながってほしい。一方で、各自が蓄積した振り返りや友達の振り返りを「つなげる活動」に活用する場面があまり見られなかったので、授業者の手立ての必要性を感じた。

(2) 第2次実践「海の命」(1月)(6時間完了)

ア 単元について

本教材「海の命」は、自然を舞台に、父を亡くした主人公の太一が、自分を取り巻く人物の考え方や生き方に触れ、葛藤しながらも自己の生き方を見つめながら成長する姿が描かれている。太一の成長や心情の変化には、周囲の人間の存在や出来事とその捉え方が大きく関わっている。読み手それぞれが関わりをどう捉え、どのような情景を思い浮かべるかは読み手の感覚や経験・知識が大きく関わるだろう。故に互いの読みを聴き合うことで物語を読み広げることができ、読み味わうことにつながる作品だと言える。

イ 研究の実際

(ア) 手立て①『つながり』を目的に、ICTを積極的に活用する。

第1次実践と同様、単元を通してアプリケーション「ロイロノート」を使用した。PDF化した教科書の本文データに書き込みする際は、第1次実践で工夫して書き込みしていた児童を全体に紹介し、参考にするように声かけをした。

以下は、与吉じいさの死と海の恵みに対する太一の心情の変化を描いた場面をグループで聴き合っている場面の授業記録である。

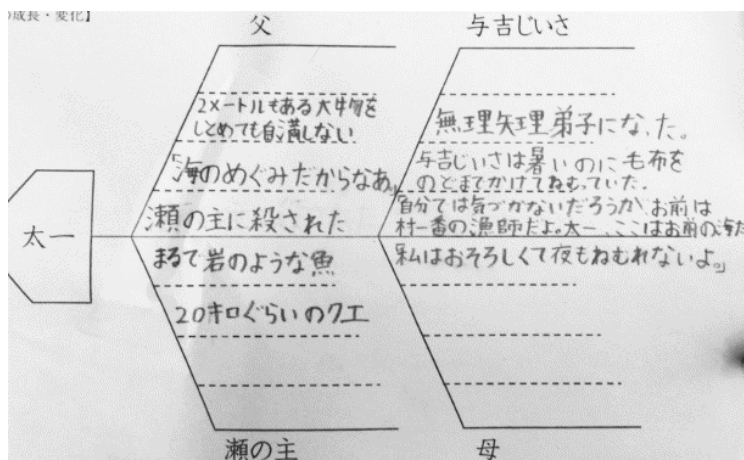
児童K	(タブレットを見せながら) 村一番の漁師って言われて、与吉じいさに認められたから、太一は嬉しいと思う。
児童A	村一番なの？
児童K	与吉じいさの中では、村一番なんじゃない？
児童A	でも、瀬の主をとってないよ。
児童L	確かに・・・漁の上手さとかじゃなくて、海を大切にすることじゃない？
児童K	そうそう。そんな感じ。与吉じいさって海の恵みを大切にしてたじゃん。(タブレットを操作して、前の場面を見せる)
児童L	前の場面で児童Nが言ってたやつ。(前時の児童Nの振り返りを提示する)
児童A	あ～。なんとなく分かった。その後の(与吉じいさが)海に帰ったってどういうこと？
児童L	第一場面で父もその父もこの海に住んでいたってあったじゃん。(タブレットを操作) だから、海とともに生きてきたんだよ。
児童A	でも、帰るって変じゃない？
児童K	ん～・・・海の恵みで生きてきたから、魂は海に戻るんだよ。
児童A	児童Mはどう思う？
児童M	・・・分かんけど、(題名が)海の命だから・・・(聞き取れず)

〈資料6 A児のグループの会話〉

児童Aは、感じたことをすぐに発信するので、この場面でも聴き合う活動の口火は児童Aであった。児童Aはどうしても言葉をそのまま受け取って解釈していた。与吉じいさの「村一番の漁師」も村で一番大きい魚を捕まえる事ができる漁師や短時間でたくさんの魚を捕まえられる漁師だと考えていたが、友達と考えを聴き合う中で「村一番の漁師」の意味合いが変わっていった。その際タブレットを操作して、前の場面を確認したり、他の児

童の考えとつながったりできたことが大きな影響を与えているだろう。

山場である太一と瀬の主が対峙する場面の前に、思考ツールを作成した。思考ツールとは、目的に沿って考えをまとめ、視覚化するものである。太一と周囲の人々とのつながりや成長につながる出来事を整理する狙いである。作成した思考ツールは、ロイロノート内の「提出箱」に提出させ、提出されたものは「共有」の機能を使って児童間で自由に見ることができるようにした。児童Aが作成した思考ツール（資料7）で、与吉じいさの「村一番の漁師」というキーワードを書いている、前時までの聴き合う活動で友達の考えを自分の読みに生かしていることが分かる。



〈資料7 児童Aの思考ツール〉

以下は太一と瀬の主が対峙する場面を学級全体で聴き合っている授業記録である。

T 1	グループでどんな話をしたか聞かせてください。
児童 B	「興奮しながら冷静」のところで、〇〇さんも書いてたけど、興奮はずっと瀬の主を探していたから分かるけど、冷静なのはどうしてかなって話しました。
T 2	なるほど。児童 B さんの話、どう？グループで聴き合ってみてください。
(グループ活動)	
T 3	児童 N さん、どうかな？
児童 N	児童 B さんと同じで、太一が興奮したのはわかるけど、冷静なのは・・・逃したくないって思ったのかな
T 4	(他の複数名の児童が挙手) 児童 O さん。
児童 O	前の場面の〇〇さんの振り返りを見てください。(全員がタブレットを操作) 父を越えたいから父の死んだ瀬にきたって書いてあるから、これは父を越えるチャンスだと思います。
T 5	ふーん。でも、結局殺さなかったんだ・・・(他の複数名の児童が挙手)
児童 A	殺そうとしたけど、与吉じいさが言ったことが・・・どこだっけ？ (タブレットを操作)
他の児童	二場面だよ。
児童 A	二十四匹しかとらなかった。このクエは二十一匹目になる。殺したら海の命がなくなるんじゃない？
他の児童	どういうこと？
児童 P	だから、児童 A が言ったのは、生きるためというか、生活するためにはこのクエは必要ないから二十一匹目になるってこと。
他の児童	なるほど。

〈資料8 全体で考えを聴き合った授業記録の一部〉

なかなか全体で意見を発信できなかった児童Bから聴き合いが始まった。第1次実践に比べて、児童Bがグループ内でも進んで意見を発信していた様子があったので、指名をした。前の場面までの聴き合いから、父へのあこがれや瀬の主への憎しみが児童の中で印象に残っていたようで、瀬の主と対峙して興奮する太一的心情には共感的だが、冷静な太一の様子に多くの児童がひっかかっていた。ここを深く掘り下げても広がりそうになかったので、意図的に先に進め「一人前の漁師になるために、父を超えるために瀬の主を殺そうとした太一だったが、結局は殺さなかったのはなぜか」という多くの児童が疑問に思っていたところへ移った。児童Aが、思考ツールでも書いていた与吉じいさとのつながりを元にした発言をした。与吉じいさの発言を引用した児童Aらしい発言である。多くの児童は児童Aの発言をよく理解できていなかったが、同じグループの児童Oが補足したことで、児童Aの考えが理解してもらうことができた。

(イ) 手立て②振り返りの蓄積と共有

第1次実践と同様に毎時間の終わりに振り返りを書く場面を設定し、ロイロノート内に提出させた。

今回は主人公がはっきりとしていたため、太一的心情に迫るように声かけをした。本単元で意識させたかったつながりは、

- ・ 太一と他の登場人物や周りの環境とのつながり（成長への影響）
- ・ 前後の展開、及び全体像として捉えた物語とのつながり
- ・ 友達の読み（解釈）と自身の読みとのつながり
- ・ 物語と自分とのつながり

の四つである。児童にも提示をして振り返りの視点として参考にするように声をかけた。

前回の実践の反省を生かして、毎授業の初めに前時の友達の振り返りを見る時間を設けた。資料8の授業記録でもあるように、聴き合う場面で他の児童の振り返りを話題にする場面があった。

ウ 第2次実践の結果と考察

(ア) 仮説Aについて

第1次実践の時に比べ、児童のタブレット操作が巧みになっており、前の場面とつながったり、他の児童の考えとつながったりすることがより容易にできるようになっていた。

児童Aを含むグループが考えを聴き合う場面では、児童Aが児童Mに話題を振っていた。以前までだったら、児童Aは自身の考えを発信して満足していたが、友達と聴き合うことの価値を見出したからこそその行動だと考えられる。文章の表面的なところしか読んでいなかったが、友達と考えを聴き合い、つながりを意識することで、物語の世界を読み広げられていた。

全体で聴き合う活動では、児童Bが自信をもって全体で意見を発信する姿が何度か見られた。それは、全体の前にグループで意見を聴き合う中で、友達が共感してくれたことに加え、タブレットを使って他の児童の考えに容易に触れることができたことも児童Bの自信につながったのではないかと考えられる。

(イ) 仮説イについて

第1次実践に比べ、振り返りを効果的に活用する場面が増え、考えをより広げていた。それは、授業中の聴き合う活動の中で他の児童の振り返りを話題にあげたり、振り返りの中で友達の考えによる自分の考えの変容を書いていた様子からもうかがえる。ただ、物語を読み深められたかという疑問が残る。「やまなし」の学習では、副教材として教科書に掲載されている「イーハトーヴの夢」を事前に学習し、作者の宮沢賢治の生き方や考え方を知り、「やまなし」と作者をつなげながら読み進めた。「海の命」の学習の際にも、事前に作者である立松和平の作品を教室に用意し、児童たちは手にとってそれらを

読んでいたが、作者の考えや生き方をつなげている場面はあまり見られなかった。感じたことを振り返りのように書き留めるように声をかけたり、授業で立松和平について取り上げたりできれば、立松和平の人柄や他の作品と「海の命」をつなげて読み、別の広がり方が出てきて、さらに深く読み味わうことができたのではないかと思う。

6 成果と課題

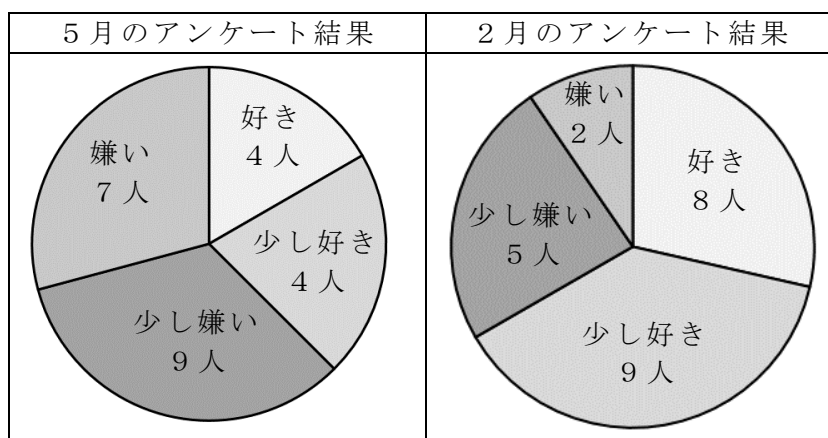
国語科の物語教材を取り上げて、ICTや振り返りを活用して『つながり』を重点に置いた指導により、仲間と共に学ぶ楽しさを味わってほしかった。一人では決して思いつかない考えや、仲間と聴き合う中で生まれた新しい考えとの出会いに感動してくれていたら嬉しい。2月末に行ったアンケートでは、国語の授業に対して肯定的に回答した児童の割合が5月に比べ増えており、児童Aも肯定的な回答に変わっていた。（資料9）国語の授業のおもしろい理由を児童A

に聞くと、「友達の考えが自分とちがうからおもしろい」と答えた。友達とつながることによっておこる自分の考えの変化や広がりを楽しんでいるのである。

課題として、ノートやワークシートなどに比べて、資料や振り返りが容易にデータで蓄積できるために、蓄積したものが多すぎて授業の決まった時間内では有効に活用でき

ていなかったことである。授業者が授業の前にデータを整理させたり、集約したものを意図的に分類したりすれば、児童は、データと自分の考えをスムーズにつなげることができたのではないかと思う。今後その方法を検討していきたい。また、今回は物語文で研究を進めたが、説明文でも『つながり』を意識した指導方法を考えていきたい。

今回の実践で、ICTの特性を生かしたからこそつながった場面があった。授業者が予期していなかった活用方法を児童が行っていたこともあった。ICTは今後、さらに身近で多機能になるだろう。しかし、やはり『つながり』がなければ学びは深まらないと今回の実践での児童の姿から改めて学んだ。今回の実践を振り返り、授業者も学習者の一人として、ICTを積極的に使って児童とつながりながら共に学んでいきたい。



〈資料9 「国語の授業が好きか」のアンケート〉